魂の演劇

工藤　隆

金になる演劇の中に既にいる者達にとって状況は好都合な商売仲間がある。状況の厳しさとか、公害とか、革命でさえも、商売になる。資本主義とは恐ろしきものである。

金になるかならないかで演劇を判断するのは、もちろん大きな危険を帯びているけれども、この社会にあって、金に結びつくものが何らかの不正と、人間の魂の死とを必ず背景に持っていることは確実だから、一応の指標にはなるだろう。

一応の指標である。だから、金にならない演劇だからと言うことで、それを無条件に認めるわけにも行かない。

ただ、金にならない演劇に全てを投入している者にとって、状況はオブラートなしの凶器そのものである。その凶器とどう切り結んでいるかいないか、この一点だけを問題にすればよいという意味で、彼等は幸せな演劇人であると言える。岡部耕大もまた、その幸せな演劇人の一人である。

2

原始段階の社会にあって、演劇的世界は、恐らく状況の全てと共にあった。人間界の罪と穢れをはらい、豊饒を祈り、「魂」に働きかけて生きる力を振るい起こす祭であった。その末裔である現代の演劇は、社会（政治）との直接的なつながりを失なって純化（退化でもあるが）されているから、状況との切り結びも「魂」の部分の比重が大になる。

岡部の作品には、確実にこの「魂」が満ちている。有限の生を不断に死につつある人間の「魂」と、体制の中で不断に殺されつつある我々の「魂」と。

生きんとする者は、「魂」の死を拒否する。拒否する時、必然的に「魂」殺しの社会的な下手人、体制と直面することとなる。

この逆の過程が新劇には余りに多過ぎる。知識として体制の悪を勉強する、だが、肝腎の「魂」が抜け落ちている、そういう芝居が多過ぎる中で、岡部の芝居は、とにかく「魂」から出発しているという意味で、確実に一つの演劇である。

3

「魂」復活の仕掛けとして、少くとも三つを彼は多用している。生きた人間の肉体と、言霊と、日本刀とである。

岡部が演出した芝居では、俳優の動きは、動けるあらゆる可能性を追求された上で、隅々まで統制され尽している。生そのものの象徴として爆発的なアクションが連続し、声もまた極限から極限へと綱渡りする。統制された爆発、醒めた神懸りである。

セリフは、意味を伝える言葉によってではで浮遊する「モノ」としての言葉によって構築されている。浄瑠璃の詞章であり、歌であり呪文である。詩や小説のように文字として書かれただけでは往生できず、空間にあくがれ出で動きつつ定着しようとする、言霊である。

さて、日本刀である。『トンテントン』『ひゅうらひゃあら』『はためくは赤き群れら―お菊の章―、―魂ィよばいの章―』『ん』『バトンタッチ』と、日本刀は常に重要な役割を与えられている。明らかに、殺陣の道具としてではなく、何かに向かって切り込もうとする意志の一つのシンボルとして登場しているのである。『魂ィよばい』では、八犬伝に材を取っているのをいいことに、八振りもの日本刀を、生花のように突き刺して陳列して見せた。殺意と、自己のぎりぎりの生と、状況への斬り込みと、その呪的な採物として機能しているのである。円谷幸吉に「魂」を投影した『バトンタッチ』では、三本の日本刀に、一枚の小さな剃刀が加わった。アクションを極度に少くした場面で、幸吉が、手首に剃刀をあてている。ライトでキラリと光るその白さに、ぞっとするような静かな脅迫を観客は強制された。

4

真実は詩の中にしか棲まないと言ったのは、郡虎彦である。体制によって押し付けられた現実が余りに多くの虚偽によって満たされている現在、また、生そのものが虚なるよのである以上、我々もまた基本的に郡に同調する。真実は虚構の中にしか棲まない。　な

しかし、虚構と一口に言っても、その中味は多様である。特に演劇の場合、肉体ごとの人間というどうにも薄汚ない素材（実体）を用いての虚構である。だからこそ、演劇は一つの力なのだ。

薄汚なさを孕んでの虚構が演劇だということを肝に銘ずる必要がある。人間の多様性がどこか一面に限定されて行く時、人はよくそれを洗練という言葉で表現する。洗練され、形式を生み、芸術へと堕落する時、それは商品になり売り物になる。

岡部の作品は、「魂」と芸術の間のスレスレの所で微妙なバランスを保っていると言える。このバランスの崩れる時が勝負であろう。その時、彼の演劇は、必ずや拡大する。

日本刀だが、この勝負の時には、恐らく彼にとってどうでもいいものへと転化するであろう。テロルによる「魂ィよばい」には限界がある。日本刀を振りかざした斬り込み隊には、悲愴美はあっても、状況は斬れない。日本刀で状況を斬れた武士はいなかった。三島も自分の腹を切っただけである。

これは、エヘラエヘラ笑いながらの一人言だが、僕などは、火事場の雰囲気のほうが、よほど好きである。

空間演技　第五弾　表現劇場

―合同公演―

真田風雲録

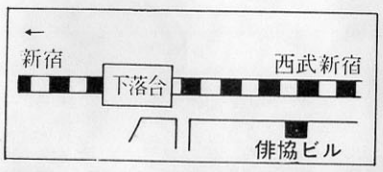
講談と歴史による三部十七舞の錦絵からなる娯楽額縁芝居！

原作　福田善之　演出　岡部耕大

昭和四十七年十二月二十三日～二十六日　毎夕六時開演（二十四日マチネあり一時半）　場所・俳協ビル二階　TEL（九五一）三六三八

ほら　ようくごらん
屍んだあの日の兄貴たちが
古き佳きをひっさげてやってきたぜ！
十年ひと昔!!
まぼろしのあれがうわさの十勇士
兄貴!!ごたく並べさせていただきます
冬すさび、風に吠えた47年！
これにて決着!!

入場料
前売り 600円
当日売り 700円
各プレイガイド発売中！



■スタッフ■

美術……石垣　守
音響……市来邦比古
照明……尾関英勇
剣技……斉木滋
日舞……花柳幾正幸
創舞……森田守恒
歌唱指導……井関麿里
舞監……高橋健彦
〃……村田正博
空間写真……中川正治
制作……表現劇場
空間演技
塩田哲生
風間杜夫
木村七保子
協力……山崎則任
えふ・えい・しい・72
作曲……林光

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

■キャスト■

むささびのお雾……藤沢薫
猿飛佐助……古関安広
三好清海入道……斉木滋
三好伊三入道……藤田範子
海野六郎……中田一貴
根津甚八……住田知仁
筧十蔵……近藤茂夫
望月六郎……鶴岡修
由利鎌之助……尼子狂児
穴山小助……宗像秀雄
真田幸村……岩手太郎

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

大野修理……大竹まこと
大野道犬……迫田茂臣
緒田有楽斉……白石建一
後藤又兵衛……楠正通
木村重成……元端一輔
豊臣秀頼……安秀夫
淀君……北川裕子
千姫……天野友美子
茶坊主……田中えみ
その他
関ヶ原の武者A
〃　B
空間演技者
坂崎出羽守……判牧人
そして
女先生……田中えみ

空間演技　世田谷区大原1-37-7〔469-6353〕　表現劇場　目黒区五本木1-2-20　みゆき荘〔711-7894〕